

戦艦、巡洋艦などほとんどやられ、残存艦隊は瀬戸内海に張り付けになっていました。

大和以下一〇隻が海上特別攻撃隊として、瀬戸内海、徳山港を出撃して南下したのは四月六日ということでした。

帝国海軍が座して滅びるより、沖縄島に乗り上げ、艦砲で上陸軍を阻止するという悲壮なもので、当時私たちに細かいことは分かりませんが、内心では生きて帰ることはできないと覚悟しておりました。

帰還できたものは「楨」をはじめ駆逐艦四隻だけでした。このように、艦船部隊へ行って生きて帰った者は珍しいのです。私たちの通信学校の同期生も約半分の一四〇〇人が死んでいます。いま生存会員で比叡山に慰霊碑を建立中です。これは我々にとっては大事業ですが、生きて帰った者のつとめであると思っております。

衡陽攻略戦は屍を越えて

三重県 萩原 祐

私は浙贛作戦の途中からで、芷江も初めからしまいで運の悪い男や、当時は騎兵だったが、浙贛作戦が終わって、昭和十八年五月編成改正になり、乙装備から甲装備編成になった。そうして第十三軍から支那派遣軍の戦闘主力の第十一軍隷下になったのです。

騎兵隊では馬が伝染病にかかり、精度のよい馬の補充がつかない（歩兵の連隊長の馬より、騎兵の一番悪い馬の方がいい馬）。それで第百十六師団の騎兵隊は解散、そこで私は出身県が三重県だから郷土部隊の歩兵第百三十三連隊へ行くことになった。

第百十六師団は四個連隊編成だったが、奈良の三十八連隊は十六師団（垣）へ抽出され、福知山、京都、久居（津）の三個連隊だけが残り、それに騎兵隊が一個小隊ずつ編入した。

漸頓作戦での消耗回復のため陣地構築や訓練をしているときに、前にも申しした甲編成（重装備）になったが、百十六師団は搜索連隊もなくなった（搜索連隊は南方へ行った）。

赤紙（召集令状）がきた時、騎兵といっても私の場合は機械をいじっていたので、司令部の動員係から「お前装甲車にしてやろう」といわれた。赤紙に○戦と書いてあるが、軍医が検査をして三列に並べた。一番小さいのが装甲車（装甲車は小さい車）、体がガンとしているのが対戦車砲、私のような細長い者は昔ながらの騎兵と三班に分かれた。私は昭和十七年四月に入ったが、京都の騎兵隊は装甲車中隊、対戦車砲中隊、乗馬中隊とあった。それで中国へ行き、歩兵の百三十三連隊に入り、常德作戦になった。私は騎兵の整通信をやっていたので、一般中隊へ行かんと、連隊長の後をついて歩いた。それから師団司令部と連隊の命令受領ばかり、そのためにまだに命がある。歩兵中隊で常德、衡陽、芷江にと作戦に行ったら命が三〇あっても足りませんわ。

師団司令部は宝慶にあって、連隊本部は葛店鎮にあつ

たのです。連隊は長沙でよその部隊（第六十八師団）が攻略している砲弾の音を聞き、横眼で見ながら一路を衡陽に向け進撃していた。たどり着いたのは十九年八月二十八日だったかな。

うちの黒瀬連隊長は、何としても衡陽一番乗りをしたいのや。六月二十八日衡陽の一里（約四_キ弱）手前、四塘というところに出たら、師団命令で「百三十三連隊は攻略するに及ばず、百二十連隊をもって攻撃する」というので、黒瀬連隊は広範囲に長いところを行軍、行軍で来たので、その辺で露営せよということになった。鈴木副官が、そこから休まそうと露営の場所を広くとった。

休ませた時、百二十連隊（福知山）が攻撃して、第一次攻撃で頓挫してしまい、夜中に「黒瀬連隊は速やかに衡陽を攻撃せよ」と命令がきた。連隊長は副官に「今から何時間後に出発できるか」といったら「四時間ぐらいかかります」という。連隊長は「準備が出来次第俺について来い」と命令受領者を連れてトコトコと衡陽の手前の山まで、百二十連隊と交替しに行った。

百二十連隊と攻撃目標の境界線を決めるなど、黒瀬連

隊長も大体の戦場を把握して、いよいよ七月二日に総攻撃を開始した。ところが二日もたたぬうちに弾薬を撃ち尽くした。一週間の攻撃中止や。夜になったら、一般中隊や行李や經理室まで全部出て、どンドン爆薬運びです。

第二次攻撃は七月八日でした。結局、衡陽攻略は四十五日も四十七日もかかったが、大本営もまさかこんなにかかるとは思っていなかった。支那派遣軍が衡陽占領したら、湘桂第二期作戦を開始することになっていた。

うちの連隊（百三十三）の小野大隊長は「百二十連隊陥さんのか。百三十三だったら三日で陥としてみせる」と言ったが、その晩に戦死している。百三十三連隊は衡陽戦だけで大隊長が六人戦死している。（一個連隊は三個大隊編成）。大隊長戦死というとすぐ南京から飛行機で飛んでくる。

弾薬、火砲が足りないというので湘江の向う側から撃った。七月中ごろになっても頑強に抵抗するので日はかり過ぎす。最後は八月になったら南京からの飛行機も協力して、日の丸の飛行機も拝めるようになった。六十八師団長も戦死をするという悲惨な状況になっていまし

た。兵隊は自分で壕を掘り、その中で持久していた。糧秣は天の助けか、湖南省は七月十五日に新米が食べられる。

それまでは食べるものがなく、糸瓜の葉とか食べていた。衡陽という街を四個師団が包囲している。一つの物に蟻が真っ黒にたかったようなもの。稲を刈る時期が一カ月遅れていたら衡陽の陥落はまだ延びた。そうなれば湘桂作戦が發起出来なくなる。弾薬の補給以上に天の助けの食物だった。

我が飛行機が来ても爆撃を一回していくだけで帰ってしまう。敵の戦闘機が絶えず回ってくるので、日本の飛行機が来ても五分もせぬうち帰っていく。

私は騎兵の通信であったので、乗馬小隊として最後までいて、毎日師団へ命令受領に行った。ご承知のとおり、命令は一、敵状、二、要旨です。「一、戦車を有した敵は師団司令部何キロまで迫っている。師団輜重と病馬廠は現在これに応戦中」「従って歩兵百三十三連隊は」と命令にある。えらいこっちゃ、と思うことが二、三回あった。「第一大隊の何中隊から直ちに応援に行け」という

ことを繰り返し返していた。師団は敵に再包囲されていることをひしひしと感じていた。

衡陽の敵陣の周りには、梯子を二つ縛らないと登り降り出来ないぐらいの深い壕が何十か掘ってある。それに鹿岩（バリケード）と地雷です。だから進めせんわ。

壕と簡単にいうけれど、今言ったように二つの梯子ぐらゐの深さだから。その壕が八月八日になるまで敵と味方の死骸で埋めてしまっている。だから壕を越えるには腐った死骸の上を行く。うつむいて行けば死骸の腐敗した液がプシュプシュとかかる。姿勢を高くすれば敵から撃たれる。

八月、いよいよ最後の時が来た。黒瀬連隊長は飛行機も来てくれない、八月六日の連隊命令には「八月六日午前五時を期して、余は連隊旗を自ら捧持して玉碎する。各隊は戦時名簿、馬匹名簿すべて焼却せよ」とある。えらいこっちゃ、全員悲痛な気持ちでその命令を聞いた。

私は命令受領から帰って日が暮れたら。「連隊長殿、岳屏高地に白旗が上がっています」と報告があった。連隊長は涙を流し、男泣き、私らも嬉しかった。岳屏高地

は一番最後まで抵抗していた。ここが白旗をかかげた。他はまだ市街でやっている。命令がゆき渡らないのだ。昼日中になって降伏命令がゆき渡って、我々は街に入った。八月八日、正式に降服の調印をした。

野戦病院

沖縄県 大川 トヨ

昭和二十年一月二十五日、軍から四年生全員、郷土を守るため疎開せずに看護教育を受け、看護隊員として協力するように校長からの伝達があり、わたしたちは、女性でも国のために役立つならと喜んで参加に同意したのである。

看護教育は校内で講義、包帯の巻き方、三角布の使用法、運動場で担架運びなどと学習することがいっぱいあった。

三月六日頃、飯塚少尉に引率され四年生は首里市赤田の山城医院跡の民家で本格的な看護教育の合宿をやり、